

「精力善用、自他共栄」

校長 原田 尚昭

山崎高等学校第七十一回生の皆さん、ご卒業誠におめでとうございます。また、今日のこの日まで陰となり日向となつて、その成長を支えて来られました各ご家庭の皆様方にも、心よりお祝いを申し上げます。

私も今を遡ること丁度四十年前にこの学び舎を後にした生徒の一人でしたが、三年間にわたつて友と過ごした日々、数々の学校行事、部活動での思い出、そして、当時教え導いて頂いた先生方のご様子が、今でも懐かしく鮮やかに蘇つて来ます。

同時に、長年を経て高校時代とその後の数年間を振り返つてみる時、勉強であれ、部活動であれ、或いは趣味であれ、様々なことに興味を持って自分の力を伸ばし、あれ程の吸収力を持っていた時期は、他にはありません。人生というものは二度と時間を戻すことはできないのですが、その意味で、高校三年間の学業を終え、明日から新たなる船出に採立たれようとしている皆さんを見ると、非常に羨ましく思います。この山崎高校で学び、体験したことを大いなる誇りとして、これからの人生を堂々と歩んで行って下さい。

さて、卒業生の皆さんが本校を巣立ちゆく今年、平成三十一年は、日本国にとつても、代替わりが行われる重要な節目の年であり、四月一日に新しい元号が発表され、五月一日には現在の皇太子徳仁親王殿下が新しい天皇に即位されます。皆さんが生まれてから今日まで過ごして来た「平成」という時代の意義をしつかりと胸に刻むと共に、今年行われるであろう幾つかの儀式を目にしながら、古代から連綿と続いて来た我が国の歴史

と伝統に思いを馳せる貴重な機会として頂きたいと願っています。世界の国々数あれど、その皇統が途切れることなく、これ程長く続いて来た国は日本以外にはありません。加えて、平成の時代に私たちが経験した二度の大震災の中で、混乱した状況にありながらも暴動を起こさず、長い列を作つてじつと食料品や水の配給を待つ日本人の姿は、奇跡として世界中に広く紹介され、大いに称賛されたことは、皆さんもよく知っていることと思います。我が国が誇るべき点は多々ありますが、これは長い歴史の中で培われて来た、私たち日本人の「美質」の一つです。時代が新たな展開を示すこの年を、日本人としての誇りを再認識する機会として下さい。

「代替わり」という言葉を思い浮かべる時、私は本校の校木でもある「ユズリハ（交譲木）」のことをいつも思い出します。毎年正月の鏡餅には、ダイダイ（橙）やウラジロ（裏白）、そして串柿と共に必ず縁起物として飾るものですが、私は昨年四月に着任して以降、折りにふれて校歌碑横、校訓碑横、そして、東自転車置き場南側でそれぞれ素晴らしい姿を見せてくれるユズリハの木を観察してきました。春になって新芽が出て、新しい葉が段々と成長するにつれて六月頃にもなると、古い葉は下の方にだらりと下がって、そして九月から十月頃になると、新しい葉の成長を見届けるかのようにして次々と落葉していきまます。その落ち葉は、また栄養分として次の世代を育てる為に生かされていくのですが、その様子から、親から子へ、そして孫へという代替わり、及び子孫繁栄の象徴として古くから珍重されて来ました。本校でも、その意味合いを重視して、教育の泉が永遠に枯れることなく、若

い生命を脈々と育むということに夢を託して、昭和四十年、第十五代校長松下政市先生の下、校木として定められたのです。

時代や考え方を「譲る」側があれば、必ず「受け継ぐ」側もあります。私たちは、それぞれの立場や生き方によって、様々なものを受け継ぎながら生きていくのですが、その指針として、「精力善用、自他共栄」という、嘉納治五郎先生の言葉を挙げたいと思います。柔道の父であり講道館初代館長、そして、日本体育の父としても、今再び注目されている方ですが、神戸のお生まれであるだけに、余計に親しみを覚えます。身体を鍛えて強健にし、精神の修養に努めて人格の完成を図り、個人の持つ力を良い方向に効率良く使うことが、人類全体の平和に繋がるという趣旨ですが、僅か八文字の中に深い思想と限りなき広がりを持つ言葉として、しっかりと胸に刻みつつ、今後の人生を歩んでゆきたいものです。

七十一回生の皆さんの前途に、幸あれ、熱あれ、光あれ！